

「ある命題の真理値が他の命題の真偽に依存する場合は、その命題の真理値はそれ自身では決定できない。」(Numquam impositio est admittenda, ubi significatio illius, quod imponitur, dependet ex veritate et falsitate propositionis, in qua ponitur.) したがって、“雪は白くない”はいかなる命題にも依存せず、ただ零次レベルの雪は白いという事態によるだけで偽であると決定されるのであり、それゆえそれは非依存的真理値付与である。しかし第2次レベルの“その命題は偽である”は第1次レベルの“雪は白くない”に依存しており、第1次レベルのそうした命題が偽であるから、“その命題は偽である”という命題は真となるのである。そして第3次レベルの“その命題は偽である”という命題もいまと同様、依存的真理値付与のケースに入るのである。

以上で本書の主要な論点を評者流にまとめ上げて述べてみたが、この本を実際に読んでみれば、論旨は十分に一貫してはいるが、その読みにくさに大いになやまされることであろう。例のドイツ的徹底性のゆえに、他人の業績を大へん利用するのはいいが、とるに足らぬ意見までもとりこもうとしているのは無駄な努力のように見える。誤植もなかなか多く、そのうえ印刷上の不手際による乱丁まであって閉口させられる。とはいえ本書が、これからの中世論理学における意味論研究のための重要な礎石の一つとなるであろうことは断定してもよいと思われる。

Alfonso Maierù: *Terminologia logica della tarda scolastica, Lessico Intellettuale Europeo, VIII*

Edizioni dell'Ateneo, Roma 1972, pp. 687.

F. ペ レ ス

論理学や言語に関する中世後期の思想は現在広く研究されており、この分野のものとして Maierù の著書は見逃せないものである。本著は T. Gregory の指導の下で書かれ、L. Minio-Paluello といった学者の協力をも得ており、またこの分野のた

めにもっともよい図書館が利用された。すなわち著者は、ローマのもっとも有名な諸図書館をはじめ、ミラノ・ボローニャ、パドゥア、ヴェネチアの図書館や、Library of Corpus Christi College (Cambridge), Bodleian Library (Oxford), Bibliothèque Nationale (Paris) のようなものをも、またドイツやポーランドやオーストリアのある図書館をも利用することができ、入手し難い文献や未刊行の写本をも参考にすることができた。

この研究の主要テーマは後期スコラの論理学であるが、多少それに先立つものをも考慮しなければならなかった。12世紀から15世紀にかけて展開されてきた論理学は確かに明白な特徴をもっているが、著者のいうとおり、古代から受け継がれたものを無視してその特徴を正しく理解することはできないであろう。もっとも強い影響を与えたのはアリストテレスであり、中世論理学の歴史が中世文化におけるアリストテレス論理学の浸透の歴史であるといっても過言ではないと Maierù はいう。アリストテレスほどではないが、ストア派とメガラ派の影響も感じられ、キケロの *Topica* のような修辞学的著作の強い影響も無視することは出来ない。ただしこれらのものの影響は必ずしも一様ではなく、世紀の移り変わりに従って大きな相違も見られる。

中世の著者たちは、古代の文献を長く研究した成果をふまえて、後世に長い発展を見せることになる固有の論理学的学説を12世紀後半から主張し始めた。それに深く関係した史実として著者は次の二点を挙げている。第一に、古代末期にまとめられた文法学書すなわち Donatus の *Artes grammaticae* と Priscianus の *Institutionum grammaticarum libri* は中世によく研究されたが、その際中世の学者たちは文法学上の諸問題をボエティウスに媒介されたアリストテレス哲学に照らして深く解明するように努めたということである。もう一点は、アリストテレスの新しい著作——特に *Elenchi sophistic*——が知られるようになったということである。論理的・言語学的諸問題に関する興味が高まっていた時期だったので、この著作は熱心に研究されるようになって、そのような問題に対する関心をさらに強くするきっかけとなった。

本著の主題は14・15世紀の著者たちの論理学であるが、しばしば13世紀や12世紀のものにさかのぼらなければならなかったのである。ところで、14世紀の著者たち

を Maierù は三つのグループに分けて論じている。第一のグループはイギリスの著者たちであるが、もっともオリジナルな者として中世論理学を体系化するために貢献したのがこのグループの人々であったと著者はいう。一番著名な代表者はオッカムであるが、重要な人物はその他にもおり、オッカムに強く反対した人もこのグループに含まれている。第二のグループはビュリダンとザクセンのアルベルトとインヘンのマルシリウスとを含む「パリ学派」であり、第三はイタリアの著者たちである。しかし最後のグループには純粋に14世紀の人は一人しか含まれておらず、その他の著者たちは14・15世紀に、またはある者は15・16世紀にまたがっているのである。かれらはみなイギリス人の論理学をイタリアで教授したものである。著者のいうとおり、第一のグループの追随者と見なされうるものなのである。

次に、本書の構成についてであるが序文の後で著者は研究の結果を7章にまとめており、各章に後期スコラの論理学の典型的な一つの用語について論じている。用語自体のアルファベット順序と問題の歴史上の発展順序を考慮して著者は章の順序を決めたという。それは、問題の多様性を尊重しながら何らかの統一を論述に与えようとしたからである。

最初の三章は、*appellatio* と *ampliatio-restrictio* と *copulatio* についてであるが、いずれも *proprietas terminorum* に関するもっとも古い議論に属するのである。第4章は *suppositio* の一つの特異問題すなわち *confusio* についてであるが、それは後期スコラの著者たちがしばしば触れるテーマであり、もっと広い枠の中で自分たちの学説を見直そうとする努力がその際よく感じられるのである。最後の三章は、*propositio modalis* と *probatio propositionis* と *sensus compositus-sensus divisus* についてであるが、著者の考えでは、実際の言語と取り組み、学問的言語をつくらうとしたかれらの分析力をこのような議論はよく示している。

中世スコラの考えと言葉使いを明らかにしようとする本書は、当時のある議論が今日においてもなお続いているということを指摘して、現在の論理学や言語学との関係についても考えさせるのである。

章の終わりに一つか二つの付録が見出される場合は多いが、その中には未刊行のものではじめて印刷されるものがある。本末には4種類の索引があり、特に三番目と四番目は非常に便利なものなのである。第一の索引は著者名及び書名の索引であり、

第二のものは研究された写本のリストである。それと違って三番目と四番目は、ギリシア語またはラテン語の原文による事項索引である。本著が明らかに示しているように、用語の意味がよく変わるものがある、コンテキストを考慮して確認する必要はしばしばある。そのために最後の二索引は貴重な助けとなりうる。

残念なことには文献目録が欠けている。ほとんど700ページの厚い本をさらに厚くしないためであったかも知れないが、まことに残念なことである。というのは、脚注に挙げられる参考文献が極めて豊富なものであるから、整理した文献目録にまとめられていれば、研究家にとって大いに参考になったろうからである。

Elisabeth Gössmann: *Antiqui und Moderni im Mittelalter,
Eine geschichtliche Standortbestimmung*

München-Paderborn-Wien, Verlag Schöningh, 1974 (Veröffentlichungen des Grabmann-Institutes zur Erforschung der mittelalterlichen Theologie und Philosophie, herausgegeben von Michael Schmaus, Werner Dettloff, Richard Heinzmann, Neue Folge 23) pp. 158.

加藤 信 朗

「昔」と「今」, 「新」と「旧」を区分するということは、それがどのような時代に行なわれるにせよ、——無自覚であっても人は常時それを行なっている——それ自体一つの問題を含みうるものである。ゲスマン夫人のこの新著は、この歴史意識の基樞に潜む分別の所作が中世人の意識の中でどのように成されていたかに著目し、Cassiodorus (ca. 485-580 後), Beda Venerabilis (672/3-735) から14—15世紀の *Devotio Moderna* に至るまで、ほぼ千年に亙る全中世期の各時期、各文化層における主要な動きを追い、着実な文献学的操作を用いて、中世人の内におけるこの現代意識 (*Modernitätsbewußtsein*) の多彩な表出——それは *modernus* と *novus* の二語によって表出される——を浮彫りにし、同時に、中世全期を一貫するこの歴史意